

e-dream-s通信

e-dream-s ホームページ <http://www.e-dream-s.org>

No.27 発行：2002年10月13日特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

e-dream-s の活動の3年目がスタートし、数々のプロジェクトが動き始めました。今年夏のマレーシア・シンガポールツアーCD-ROM 化、助成金の申請、年末・年始のカメルーンツアー、来年春の米国チャータースクール視察ツアー、そして来年夏からスタートする ECAP プロジェクト（詳しくは本文を参照）。各プロジェクトの担当者を中心に、すべての会員が積極的にに関わり、プロジェクトの成功を目指しましょう。



教育用写真アーカイブ @aglance もますます充実。実践例の紹介や、今後の写真掲載予定のページも新設されました。マレーシア・シンガポール夏期セミナーで多数寄せられた写真は、11月に掲載予定です。

(シンガポール独立記念日のパレードの写真)

- | | | | | |
|----|---|----------------------------|-------------------|-----|
| 目次 | 1 | あなたは本が欲しいのか、それとも読みたいだけなのか？ | 辻 荘一 | p2 |
| | 2 | 社会の“実験と副産物” | 中川 房代 | p3 |
| | 3 | ある NPO のチャレンジ | 山田 昌子 | p4 |
| | 4 | ECAP 新・異文化理解教育の必要性 | 井川 好二 | p7 |
| | 5 | ECAP 韓国コンタクトパーソンとの協議進行状況 | 塚本 美紀 | p10 |
| | 6 | ECAP 実行委員より | 藤澤 俊之 稲川 宏美 山本 貴子 | p11 |
| | 7 | 「おまかせ！教師のパソコン」授業実践の取材裏話 | 道面 和枝 | p13 |
| | 8 | お知らせ | | p15 |

あなたは本が欲しいのか、それとも読みたいだけなのか？

辻 莊 一

現在日本では各自治体に図書館があり日本のほとんどの場所で只で読みたい本を読むことが出来る。2002年10月12日付けの日経新聞によればこの状況 になったのは1960年代から70年代にかけての市民図書館運動の後押しによるものらしいが、その公立の図書館が苦境に立っている。不況の中で予算を削 られていることと活字離れがその原因らしい。保管費、人件費などその維持に膨大な予算が必要だということは想像に難くない。

ただ私自身の勝手な都合を言わせて貰えれば、図書館は使い勝手が良くない。自治体の公立図書館は夜は開いてないし蔵書は中途半端、だいたい図書館に行く のも面倒だし、返すのも面倒だ。そういうわけでほとんど図書館は利用しない。

そもそも本は二つの全く違った側面を持っていて扱いが難しい。商品（物）としての側面と情報（内容）という側面である。書店にある時は商品だが図書館では情報である。書店では客は内容と品物の両方を購入するが、図書館では利用者は本そのものではなくその内容を求めて来る。図書館では情報だけを取り出して管理できれば大幅に予算を削減することが出来るのだが、物としての本とその内容を切り離して取り扱うことが出来ないために、物としての本の管理に膨大 な予算が必要となっているのである。

だが将来的には、デジタル化の技術が進んで書籍のデジタル化が可能になることは十分考えられる。そうなればまさにウェブ図書館が可能となり、現在の形の 図書館は不要となる。家からインターネットで書籍を検索し必要な書籍は自宅のプリンタで出力する。借りに行く手間も返す手間も省ける。問題はプリントアウトのコストだが、何回でも印刷できる特殊な紙の開発が進んでいるとの報道もあり、まんざら夢物語ではない。

問題は著作権だ。デジタル化した情報はコピーをつくるのが簡単で無料で出回る。その状況でいかに作者の著作権を守るかが課題となる。ただ今でも著作権は完全に保護されているとは言いがたい。本の著者は本が売れるたびに印税という形で報酬を受け取るが、図書館で何回貸し出されても、あるいは古書店で本が売られても本の著者にはお金は入らない。これは、作者への報酬が内容に対して（つまりその本が読まれるたびに）支払われるべきなのに、形としては商品としての本の販売数によって支

払われるという矛盾を抱えているためである。

@aglance は一種のデジタル化された写真図書館だが、これは非営利かつ教育目的ということで撮影者の一定の範囲内で著作権を放棄してもらってなんとか可能になっている。同じようなことをデジタル化された公立の図書館でやれば本を書いて食べていける人間はいなくなるだろう。

この矛盾を解決する魔法の杖は、「コピーが作られるたびに作者に報酬が支払われる仕組み」である。これが難しいのはわかっている。だがもし出来たら出版界だけでなく音楽業界やゲーム業界まで及ぶ大革命が起こるのは間違いない。それこそノーベル賞ものだと思うのだが、だれか作って貰えませんかね。

社会の“実験と副産物”

中 川 房 代

1995年1月の阪神・淡路大震災を契機にしたボランティア意識の広まりを背景に、1998年「特定非営利活動促進法」が成立し、“NPO 法人”が日本に存在することになった。そして現在のNPO 法人の数は全国で8,000、申請を含めると9,000を超えている。(内閣府発表 8月30日現在、<http://www5.cao.go.jp/98/c/19981217c-npojyuri.html> より)

1998年春、「NPO って何？」から始まった私とNPO とのつきあいも4年半を経過した。2000年3月、ACROSS という教師の研修組織を母体として e-dream-s を立ち上げ、7月には法人格も取得した。

当時、よく分からないなりに情報を集め (e-mail はしていたがインターネットでの検索なんて思いもつかなかった!)、NPO のセミナーに参加したり、NPO 支援組織の相談の機会を利用したりして設立の準備を進めた。法律の条文を読み、支援組織や行政から出されているマニュアルを参考に、定款などの書類を整えた。

そして、今改めて NPO 法の成立の背景や、社会的・政治的・経済的な意義を勉強していると、なぜこのような法律の条文になったのか、その意味は何か、が徐々に見えてきた。当時の私の理解の薄さを感じ、もう少し勉強すべきだったかなあという反省も湧いてくる。

e-dream-s やそれぞれの NPO 組織は、それぞれ目的や事業を以て活動しているが、それと同時に NPO の存在総体の果たす役割も大きいことに気づく。破綻しつつある日本の社会・経済・政治の中で、NPO は新しい社会のあり方、枠組、方向性を決める大きな役割を担っている、ということだ。第 1 セクター（行政）、第 2 セクター（企業）に対する第 3 セクターとして、社会の中でそれぞれがそれぞれの役割を果たすことによって、また協働・協力する中で、私たち自身がどういう社会を目指すのかを決めていくのだ。

また、NPO 法が議員立法で成立したこと、民法の特別法として成立したことは、立法のあり方の検証や 100 年以上旧態依然たる民法の改革にも向かっていっている。NPO 法人のあり方・優遇税制の問題の論議を通じて、天下りや報酬が問題化している公益法人の改革にも踏み込んでいっている。

そんなことも考えていると、今、社会のドラスティックな変動の中に私たちが存在していることを感じる。ある意味、NPO は今後の社会を占う実験的な存在であるともいえるのではないか。NPO 活動の副産物の意義も大きい。そして、その渦中にいることを楽しみたいと思っている最近の私である。

ある NPO のチャレンジ

山田昌子

最近ある教科書に載っていたことから、大阪の NPO である「プロップ・ステーション」の存在を知りました。テレビでも紹介されることが多いので、御存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、少しばかり紹介させてください。中心となって活躍されているのは、竹中ナミさん。お嬢さんが重度の障害を持って生まれたことから、彼女は障害を持った人々のボランティア活動に参加するようになったそうです。次第に彼女は、自分で何もできないくらいの重度の障害を持った人はほんのわずかだということに気付きました。アメリカでは多くの

身体障害を持った人々が社会参加、経済的自立をし、自尊心を持って生きている、日本でもやれるのではないかと考えるようになったと言います。

障害を持った人々、つまり「チェレンジド」が働ける社会システムを作り、チェレンジドも働いて納税者になり、社会を支える一員になることはできないか、彼女は考えました。ちゃんと義務を負えるようになってこそ、社会に対してモノ申す権利も生まれてくる、権利を主張するなら、応分の義務や責任を負う、それが本当の自立だと、ナミさんは言っています。つまり、プロップ・ステーションの目標は、チェレンジドを納税者にする支援をすることで、その事業は、年齢や障害のためこれまで働くことができなかった人のためのコンピュータ・セミナーを企画し、修了者の仕事探しのお手伝いをする支援事業なのです。私たちがコンタクトレンズを付け視力を補うように、サポート機器があればコンピュータを使いこなすことは可能、インターネットが発達している現代では在宅勤務もできる、コンピュータを自立の武器にしようと彼女たちは活動されています。今では、マイクロソフト社からの応援も得、あのビルゲイツ会長と会談したこともあるのです。

現在パソコンやそのネットワークを使ってチャレンジドの自立や就労に役立てるというNPO活動は全国各地で行われているけれど、プロップ・ステーションがスタートした時は、無謀な取り組みだと言われました。ナミさんのエネルギーだけですべてがうまくいったわけではありません。パソコンは高価で、設備は整っていませんでした。課題は山積みでした。現在のような成功を得るため紆余曲折が数多くあったと、想像するのは簡単です。例えば、アップル社に駄目もとで欲しいと申請したパソコンや周辺機器が数多く届いたが、それは誤送だとわかった、が、当時外資系の会社の社会貢献の気運があったことも手伝って、結局アップル社は気前よく寄付してくれ、その後も多くの寄付がなされている---これは偶然と運がうまく作用したとしか考えられません。ナミさんは、偶然と運を呼び寄せるには「誇りと夢を持つ」ことだと言っています。また、障害を持った人たちだけでなく、すべての人々が神からチャレンジすべき課題や才能を与えられている、試されているんだとも語っています。私は、このような一貫した考え方、**philosophy**こそ大切ではないかと思っています。

また、明るくポジティブなナミさんですが、厳しさも兼ね備えています。「最初話した時厳しいとこやなあ」と思ったコンピュータ・セミナーの受講生も多くいるそうです。『出来るようになってやるぞ』という気持ちがなかったら出来ない、仕事を取れるだけのスキルを身につけるといことは大変なことだ---これは **ACROSS** でいう「プロ意識」でしょう。厳しさの中に大きな誇りと夢がある、これは、私たち **e-dream's** と共通するところが大きいと思

ます。

今、プロップ・ステーションがつけた火があちこちで起こり、例えば、三重県の労働商工部に予算がつき、多くのボランティアが集まって活動が始まっているそうです。該当の NPO だけが活動をするのではなく、その考え方が、全国に、世界に広まることもまた、社会を変えるためには、大切なことだと思います。

私は、プロップ・ステーションを知って、e-dream-s が目指しているもの的一端を見たような気がしました。私たちの挑戦はまだまだこれからです。でも、誇りと夢はいっぱいあります。副代表理事と私は、この冬、教育支援事業の予備調査として、カメルーンに行きます。これまでのアジアツアーとは異なるところが多く、何が起こるかわかりません。大いにチャレンジしたいと思います。

竹中ナミ. 1998 年. 「プロップ・ステーションの挑戦—『チェレンジド』が社会を変える」(筑摩書房)

Nami Takenaka with Prop Station. 2000. Let's Be Proud! The Japan Times.



ECAP (Educators' Collaboration of Asia-Pacific)

新・異文化理解教育の必要性

井 川 好 二

21世紀前半の世界は、(1) アメリカの政治・経済・文化を地球規模のスタンダードとする「グローバリズム」の急速な進行と、(2) 民族と文化をアイデンティティとする「リージョナリズム」の深化が、お互いに拮抗し、かつ補完しあう社会であると言われている。日本を取り巻くアジア・太平洋地域においても、巨大生産基地・消費社会としての中国の台頭、朝鮮半島における南北統一、日本の「リーダーシップ」の再構築など、多くのタスクがそれぞれに矛盾と課題を抱えつつ進行している。

国際政治、国境を越えた企業活動と消費者経済、若者文化を中心に、「外向き=グローバル化」が進行する一方、国内政治と結びついた国内経済、宗教、地域文化などを軸に、「内向き=地域主義」が強まり、経済情勢、国際的な事件、移民の動向を契機に、両者の矛盾が国際的、国内的対立へと展開する可能性を含んでいる。

こうした国際情勢の中で、教育の果たす役割の重要性が再認識されなければならない。アジア・太平洋の各地域において、よりよい異文化理解を目指す教育が、再構築される必要がある。

新・異文化教育は以下の点にまとめることができる。

- (1) 生徒自身の持つ興味を発展させ、より深い理解、意識の変革へ導く指導法をとる。
- (2) 個々の異文化を教材(サンプル)として取りあげるが、知識の百科全書的蓄積を目指すのではなく、生徒個人が「異文化理解の公式」としての意識、知識を自ら構築することを目指す。
- (3) 教師自身が時代に対応して変化し、異文化に心を開き、知識を刷新する必要がある。

こうした「新・異文化理解教育」をアジア・太平洋地域において推進するために、NPO 法人

「e-dream-s」は、ECAP (Educators' Collaboration of Asia-Pacific) 「アジア太平洋州教師によるコラボレーション：3言語による相互理解教材開発プロジェクト」を企画、運営する。

- プロジェクト名称： ECAP (Educators' Collaboration of Asia-Pacific) 「アジア太平洋州教師によるコラボレーション：3言語による相互理解教材開発プロジェクト」
- 企画・運営： NPO 法人「e-dream-s」(本部：大阪府)
- 協力： ACROSS
大阪 YMCA 英語教育研究所
Temple University 教育学部大学院 (PA)
EIRC (ニュージャージー州立教育センター)
- 期間： 2003 年度～2012 年度までの 10 年間
- コラボレーション開催国 (予定)：

#	年度	開催国
1	2003 年度	韓国
2	2004 年度	ベトナム
3	2005 年度	インド
4	2006 年度	タイ
5	2007 年度	ニュージーランド
6	2008 年度	中国
7	2009 年度	アメリカ
8	2010 年度	インドネシア
9	2011 年度	オーストラリア
10	2012 年度	マレーシア／シンガポール

- コラボレーションの内容
(1) 日本の教師が、夏休み期間中にコラボレーション開催国を訪問し、現地の教師と共同

で、両国相互の異文化理解教材（中学・高校用）を、英語、日本語、現地語の三ヶ国語で執筆・編集を行い、帰国後に出版し、両国での授業の教材として使用する。

- (2) コラボレーションで作成する教材は、「ここが知りたい○○○」（例、「ここが知りたい韓国」「ここが知りたい日本」など）とし、相互理解の上で基本となる項目の Q&A 形式にする。
- (3) コラボレーション開催時に、該当国教師が英語で執筆した A の部分を叩き台として、両国の教師がディスカッションを行い、事実関係の確認、教材としての妥当性などを検討し、共通理解を深める共に、英語版の完成、両国語版への翻訳・編集を行う。
- (4) 開催国訪問前に、両国の中高生に、アンケート調査を実施し、「ここが知りたい」の Q の部分を抽出する。
- (5) 両国教師により、アンケート結果を各国約 10 項目のトピックに絞り込み、各国教師間でトピックへの回答担当を割り当て、開催までに英語による回答を完成し、e-mail 等で相手国担当教師へ送付する。
- (6) コラボレーション、および事前、事後のコミュニケーションは、英語で行うこととする。
- (7) 英語版の検討、討議、完成のサポートを行うため、コラボレーションに、アメリカ人、オーストラリア人、ニュージーランド人などの英語を母国語とする ALT (Assistant Language Teacher) の参加を要請する。
- (8) コラボレーションは、トピック毎に両国の教師、英語ネイティブの小グループを主体として進行することとし、最終日の全体会で、完成された 3ヶ国語版のプレゼンテーションを行い、参加者全体での意見交換を行い、最終版を採択することとする。
- (9) コラボレーション開催中（3泊4日を基本）は、宿舎、食事なども、両国のメンバーおよび英語ネイティブの小グループで共通とし、教材作成以外の面でも、幅広い交流を図る機会とする。
- (10) コラボレーション開催中に、両国教育事情理解のためのプレゼンテーション、異文化理解教育に関する意見交換会、異文化理解教育のための講演などを、あわせて実施することとする。

(Friday, October 11, 2002)

<p>* ECAP 実行委員の募集が行われ、4名の実行委員が決定しました。 それぞれの実行委員の方から寄せられた原稿を次に掲載します。</p>

韓国コンタクトパーソンとの協議進行状況

塚 本 美 紀

現在、ECAP の準備のために、直接連絡をとっている人は二人います。一人は、韓国人英語教師 Kwon Young Hee さんで、もう一人は、アメリカ人教授 Dr. Edward Klein です。

Young Hee は、私が 2000 年英国リーズ大学留学中に知り合った人で、当時彼女は、同大学の修士過程で TESOL の勉強をしていました。博士課程で研究をしているご主人と、小さな二人のお子さんと一緒に英国に滞在していました。韓国は日本よりも早く、高校教師の留学のための休職が認められていて、Young Hee もその制度を利用している一人でした。現在は、韓国に戻り、ソウルにある Karak High School で英語を教えています。ECAP には、関心を寄せていて、自分にできる限りのことをしたいと言ってくれています。現在、韓国の教員団体へ、コンタクトをとり、ECAP への韓国人教員の参加募集の下準備をしてくれています。11 月初旬に行なう下見では、ソウルで会い、ECAP の企画内容についての話し合いを行うことにしています。

もうひとりのコンタクトパーソン、Dr. Klein は、ハワイ・パシフィック大学の TESOL の教授で、韓国の高校で英語を教えた経験のある方です。現在も韓国を訪問することが多く、現地に多くの知り合いがいらっしゃるそうです。何らかのかたちで、お手伝いできることもあるかと思うので、詳しい計画ができ次第、知らせたいとのことなので、こちらの計画の進行状況をお知らせし、連絡をとりあっているところです。

私の勤務する福岡県には、韓国の高校と姉妹校提携をしている学校がいくつかあり、その日本側の担当者を通じて、それらの学校に ECAP についてお知らせする文書を送っています。研修には興味をもっている先生が多いので、はっきりした計画が決まり次第、知らせたいとの返事もいただいています。今回の企画は、韓国人、日本人、英語を母国語とする人々のコラボレーションによって教材を作り上げると言うものなので、現地の先生方に多く参加していただくことが不可欠です。企画自体を魅力的にすることももちろんですが、その企画を多くの韓国の先生方に知っていただいて、積極的な参加者をたくさん得ることができるよう準備を進めていきたいと思っています。

実行委員として

藤澤俊之

2002年マレーシア、シンガポールツアーの写真、ビデオ整理もまだ終えぬ中で、早くも来年度韓国ツアーの準備が始まった。

実行委員をしていると、いろんなことが経験できる。去年で言うと、マレーシアの元タクシー運転手アズリーさん一家との出会い。忘れられないのは、アズリーの義理のお父さんが、歌ってくれた日本の歌。それと、アズリーさんに連れて行ってもらった、移動遊園地の近くで売られていた、9.11. オサマ、ビン、ラディンのTシャツ。

これまでの、何回かのツアーで共通しているのは、それらが偶然であれ、計画したものであれ、いろんな出会いに恵まれてきたこと。

今回に関して言うと、早くも塚本先生が手はずを整えてくださって、まずは順調に、事前ミーティングの日程が決まった。相手の顔が少しずつ見えてきだすと、いよいよだなと思う。

今回は、韓国。ソウル付近を中心に行われる予定。内容も韓国との人々との、共同作業を通じて、お互いの国や文化についての、疑問に答えようと言う試み。今回のプログラムほど、“英語で”ということが意味を持つプログラムは、なかったのではないかと思う。

とにかく、イーDreamズ、アクロスのプログラムの神髄は、異文化交流を中心とした、充実した独自のプログラム。今回は、どういう経験ができるのか、出会いがあるのか、楽しみである。そして、今回も実り多きツアーになるよう、がんばっていきたいと思う。

ECAP 実行委員となって

稲川宏美

「これであと10年はまた、いろんなところでいろんな事ができるなあ。」楽しそうに語る I 顧問の笑顔は、本気でその10年を駆けていくつもりがちがいない。

ECAP の構想は、私達英語教師の夢を具体化する。何のために言葉を学び、使うのかのエッセンスを実行していくようなものだ。生徒達の現実をふまえたアンケート作りから始まって、それぞれが異文化理解の手だてを探っていく。海外の教師と共に自分たちで討論し作り出した教材をもってさらに異文化理解教育を広めていく。そしてその一つ一つの過程にかかわることが自己研修そのものとなる。えられるものは大きい。限られた時間と行動範囲、限られた資金しかない私達でも、これからの10年、本気でやっていけばすごいことができる。

そのスタートにあたるこの実行委員会に入ることができて本当にラッキーです。10年を駆ける脚力をみにつけるべくがんばります。

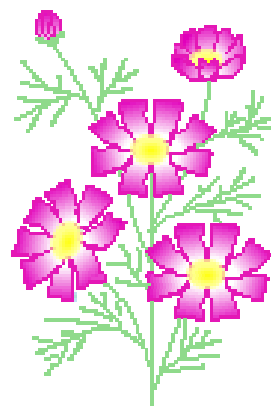
ECAP 実行委員としての抱負

山 本 貴 子

私は、この夏のマレーシア・シンガポール研修の後、「来夏、韓国研修の実行委員をやらせてください。」と申し出ました。

何度かアクロスツアーに参加していますが、実行委員の方々の立場や、動きを考えたのは、実は、今夏が初めてでした。それまでは、いわば、お客様の存在でした。しかし、いつまでもお客様では、本当の意味で参加しているとは言えないような気がしたのです。

皆さんが納得し、満足できるツアーにしていけるように、他の実行委員さん達とがんばってやっていきたいと思っています。どうぞよろしく願いいたします。



「おまかせ！教師のパソコン」授業実践の取材裏話

～案ずるより産むが易し！？～

道 面 和 枝

辻先生からのメールで、@aglance の写真を活用した授業実践の取材依頼があることを知りました。立候補者はいませんか？という PC 画面の文字がチカチカと脳裏に焼き付くこと一日半。迷った挙げ句、授業実践の収集をしていることもあり、思い切って立候補しました。しかしあとになって、現在の勤務校はインターネットに接続可能な PC がパソコンルームに 1 台しかないというサイアクの環境であること、加えて、連日の器物破損・授業妨害など生徒の実態等々、現実の課題を思い出し、頭を抱えてしまいました。がしかし、かえってチャレンジ精神が湧いてきて、どの教材でどんな授業を組み立てようか、と頭を切り替え、このタスクはスタートしました。

結局、報告済みの「中国の写真を使った授業」の延長として、その時使用した写真の取り出し方を実際にやって見せることから始めよう、と指導案を考えました。目標は、パソコンが学習に活用できる、ということを具体的に示すこと。例えば@aglance の HP から「簡単に」世界中の写真が取り出せる、メール友達募集のサイトから「簡単に」世界中の同世代のメル友を見つけて返事が出せる、などの具体的な方策を見せることによって、生徒の知的好奇心を刺激しよう、というのがねらいです。この「簡単に」というキーワードが、実は『おまかせ！教師のパソコン』という雑誌のコンセプトでもあるということを知り、ビックリしたのが取材当日。編集長の川村氏が開口一番、言われた言葉です。

「フツウの公立の学校で、別段パソコンの知識に長けているわけでもないフツウの先生が、フツウのパソコン環境の中で、少しばかりの工夫をすれば、だれでも生徒の興味をひいて教育的効果のある授業ができますよ、ということを紹介する記事にしたいんです。この雑誌は、パソコン初心者の先生方向けの雑誌ですから。」この言葉にホッとして、リラックスして授業に臨むことができました。

雑誌の記事は、@aglance の「雑誌紹介」にも載せていただいた通りです。さすがプロのお仕事、たいへんわかりやすい、実際の授業よりも出来の良い！？紹介記事に仕上げてくださいました。もちろんその裏には、数々のハプニングがありました。

その1. 授業直前にインターネットに接続できなくなる！

1時間前からパソコンルームに入り、教師用PC、プロジェクター、スクリーンなどの準備は万端！のハズだったのに、本校のPCはファックスの回線とも微妙に連動しているため、インターネットをつなぎっぱなしにしておく、途中で接続不能になる、ということがあつらしく、授業開始チャイムの鳴る1分前にフリーズ！技術科の先生を呼びに走るは、川村氏にPC操作をバトンタッチするは、とにかくアセりました。結局セーフ！

その2. 目当てのモアイ像が見つからない！

生徒からのリクエストの写真を見せるコーナーで、予想としては、当時の新着写真であった「モアイ像」に興味を持つだろう、と準備をしていました。たくさんある中のどれを見せるかは、前日ピックアップ、番号をメモしていたのです。が、しかし！新着写真は、毎日追加・更新されるわけで、そのたびに番号が変更になる、ということを知らなかったのも、たった半日のうちに、2ページ分くらい更新されていて、当初調べていた番号と食い違い、お目当ての写真を一発で出すことができず、ロスタイム続出！生徒もザワザワし始め、暗雲が立ち込めた一瞬でした。

(授業終了後の反省会で、川村氏からのアドバイス。「ああいうときは、さっさと切り上げて次に行く潔さも必要ですね。」なるほど。)

その3. HPのアドレスの書き取りに手間取る！

TVやラジオで、「詳しくはホームページで。」という決まり文句に続いて、HPのアドレスが映し出され(あるいは読まれ)、それをメモするというのは、これからも生徒が経験することであろう、と思い、実際に、@aglanceのアドレスを読み上げ、書き取らせてみました。(当時は、前のバージョン、少々長めのアドレスでした)。

しかし、「アットマーク、ドット、スラッシュ」などの説明も加わるとお手上げの生徒も出てきて、準備していた画用紙にマジックで書いて示したけれど、見えにくい。生徒のイライラも募り、再び暗雲が…。

(これは自分で解決。次のクラスからは、事前にワードでアドレスを作成しておき、その場面になると、画面をワードに切り替えてスクリーンに大きく表示する、というワザ(つてほどでもナイ)を使いました。生徒からも、「オオ〜！」という声上がり、ちょっと得意。ちなみに、応用として、パソコンルームに入った際の座席の指示も、「廊下側の前から1班、2班の順で着席。」など、スクリーン上にワードで作成した文字を映しておき、のっけから「PCを使った授業」という雰囲気醸し出しました。)

授業を終えての生徒の感想は、雑誌の記事に載せてある通りです。

この「パソコンを活用した授業」は、1学期末に行った生徒への授業アンケートでも、「これからも続けて欲しいこと」として、それまでトップだった「洋楽を聞くこと」「ゲーム」を押しつけて、堂々1位に輝きました。となれば、次にどのようにPCを、@aglanceの写真を活用した授業を行なっていこうか、と思案中です。英語の授業に限らず、3学期に開始する総合的な学習（国際理解）の資料作成に役立てようと考えています。

まだまだ、活用のしかたはあるはず。小学校での活用例がほしくて、近隣の小学校を訪ねては、先日出来上がったパンフレットと「朝日小学生新聞」のコピーを渡しています。皆さんも知り合いの小学校の先生に、@aglanceの活用をPRしてみてもいいでしょうか？

最後に、長年にわたって教育現場で教師のPC使用の現実を見てこられた川村氏が話された中で印象に残ったのは、次の言葉です。

「現場の先生が授業でPCを使いたがらない一番の理由は、途中でトラブルが起きたらどうしよう？ということです。でも、トラブルはつきものであり、そういうときは思い切って次に進む、などの切り替えが必要。心配ばかりしていると何もできませんよ。」

なるほど、「案ずるより産むが易し。」これからも、失敗を恐れずに新しいことに挑戦しよう、と思いました。そして、そのチャレンジ精神をあと押しする知識、自分の場合は「パソコンの知識」をもっと身につけようと思いました。

* 「おまかせ！教師のパソコン」で掲載された記事は、写真アーカイブズ @aglance から見るができます。 <http://www.aglance.org>



お知らせ

「米国チャータースクール視察ツアー」参加者募集

8月の総会で今年度方針の報告がありましたように、「教育ネットワーク事業」「教育改革提言事業」として、来年3月末に「米国チャータースクール視察ツアー」を行います。e-dream-sが、日本における教育のあり方を探り、提言・実践していく第一歩となるツアーにしたいと思います。奮ってご参加下さい。

フライト予約の都合上、10月15日を参加申し込みの「第1次締めきり」とします。これは最終締めきりではありませんが、現時点での参加希望者の人数を把握したいと考えますので、「参加したいが、まだ先のことで予定がたたない」という方も、「必ず」ご連絡下さい。

<要項（現在の予定）>

1. 目的：近年、米国において教育改革の1つの核となっているチャータースクール運動の実際を学び、日本またはアジアにおける同種の学校開設、運営の可能性を探る
2. 主催：e-dream-s、大阪YMCA 英語教育研究所などとの共催
3. 期間：2003年3月25日（火）～3月31日（月）<6泊7日>
フィラデルフィア3泊、ニューヨーク2泊、機中1泊
（往路：関西空港発→成田空港経由、復路：成田経由→関空着）
4. 訪問先：米国ニューヨーク市、ペンシルバニア州のチャータースクール数校
5. プログラム内容：
 - (1) チャータースクール授業見学
 - (2) 管理職・教員との意見交換会
 - (3) チャータースクール運動に関する講演
 - (4) ホームステイ（教員または生徒宅）
6. 参加費用：258,000円
7. 参加申し込み第1次締めきり：10月15日（火）夜12時
8. 問い合わせ・参加申し込み：中川まで。 E-mail: nakagawa@e-dream-s.org

NEWS A CD-ROM 作製・作業者募集のお知らせ

ACROSS からの委託事業である「NEWS A CD-ROM 作製事業」も後半に入りました。現在 NEWS A 紙面のスキャンを終えており、あとはデータベースの作成とその確認作業で完成となります。1 月初めの完成を目標に、以下の要項で、作業のお手伝いをしてくださる方を募集します。皆様のご協力をお願いします。

申し込み・問い合わせは、中川までお願いします。作業に必要なグッズや情報は担当の飯田さん、丸野さんからお送りします。尚、1 人あたりの作業量を基に募集人員をお知らせしていますが、2 人分または 3 人分の作業を希望する場合も大歓迎です。

1. キーワード等チェック作業

- (1) 期間：11 月中旬まで
 - (2) 作業内容：エクセルに入力済みのキーワード等のチェック
 - (a) 画像と執筆者・タイトル・サブタイトル・キーワードの合致の点検・訂正
 - (b) キーワードの適切性の点検・修正・削除・追加
 - (c) それらの誤字・脱字の点検・訂正
- *作業にあたってはマニュアルがあります。
- (3) 募集人員：13 名
 - (1 人あたりの作業量：紙面 92～150 ページ分、延べ約 7～14 時間として換算)
 - (4) 必要なパソコン環境：Mac、Windows いずれもエクセルがインストールされていること
 - (5) 応募締め切り：10 月 20 日（日）

とりまとめの都合上、締め切りを設定しますが、締め切り後も受け付けます。
 - (6) 応募先：中川まで

2. データベースファイル作成作業（予告）

- (1) 期間：11 月中旬から 12 月中旬を予定
- (2) 作業内容：紙面の画像とエクセルに入力済みのキーワード等を基にデータベースを作成
- (3) 募集の詳細は後日お知らせします。

ダンケル氏来阪イベント（仮称）

アメリカ・ペンシルバニア州マウントカーボン村（人口 87 人）で昨年 11 月に 18 歳の大学生村長が誕生しました。名前はジェフリー・ダンケル氏。この 11 月に、子ども・若者の社会参加・政治参加を進める東京の NPO が彼を招聘し、東京などでイベントを開催します。その日本滞在中、大阪に立ち寄ることになりました。そこで、e-dream-s 主催でイベントを開催します。詳細は後日連絡します。

日時：11 月 12 日（火）夜

会場：大阪 YMCA 会館（大阪市西区土佐堀）

<ダンケル氏参加の関連イベント>

Rights フォーラム 2002 国際シンポジウム

「子ども・若者の意思決定過程への参加を考える-各国のとりくみの成果と課題から-」

期間：2002 年 11 月 15 日（金）19：00 ～ 17 日（日）16：00

場所：国立オリンピック記念青少年総合センター

詳細は <http://http://www15t.sakura.ne.jp/~rights/index.htm> を参照してください。

カメルーンツアー参加者募集

会員の皆様には e-メールでもご連絡させていただきましたが、e-dream-s 国際部では、「カメルーンツアー」を企画しています。これは、今夏の総会資料にもありましたように、教育支援事業の一貫（予備調査）として行うものです。飛行機の予約の都合で募集を締め切りましたが、どうしてもという方は御相談ください。

1 日程： 12 月 26 日出発、1 月 6 日帰国（フライトは、パリ経由）

2 今回のツアーの位置づけ：

e-dream-s の事業として、今後カメルーンへの教育支援事業を実施できないかどうか、予備調査し、検討するツアーとしたい。

3 ツアーの内容：

カメルーン各地の視察（首都ヤウンデ、大商業都市ドウアラ、北部、東部訪問の予定）、学校は休業中だが、校舎訪問、先生方との懇談、ホームステイ等も行う。

4 費用： 飛行機+ホテル費用のみで 42 万円以内。その他は、個人で。

5 カメルーンのコタクトパーソン：

外交官パスカル氏（6月に e-dream-s 主催カメルーン学習会を開催したが、その時のスピーカー）。現地の全行程、同行してくれる予定。また、彼、又は彼の友人宅でのホームステイも企画する予定。

6 今後の進め方：

（ア）参加者で e-メールを利用して連絡を取り合い、学習会を行う予定（カメルーンの現状等）。

（イ）参加者確定後、ビザ取得が必要。（旅行業者に頼む予定）

（ウ）予防接種が必要（黄熱病は必ず接種すること。狂犬病やA型肝炎、破傷風は接種した方が望ましい。但し、すべてを一度には接種できないので、期間が必要）。マラリアについては飲み薬が必要。

7 現在の参加希望者： 副代表理事 中川房代、理事 山田昌子

8 企画・実施 e-dream-s 国際部

9 旅行業者： 近畿日本ツーリスト

10 お問い合わせ等：

e-dream-s 国際部 山田昌子

〒610-0102 京都府城陽市久世下大谷18-25

TEL / FAX : 0774-54-3241 E-MAIL : yamada@e-dream-s.org

第28回全国語学教育学会(Japan Association for Language Teaching) 年次国際大会-JALT2002, Shizuoka-

テーマ：「未来への波動」 “Waves of the Future”

日程：11月22日（金）～24日（日）

会場：静岡グランシップ国際会議場

詳細・申し込みは、<http://jalt.org/jalt2002> を参照してください。

編集後記

今、英語の教科書でモンゴルを題材にしたものを教えている。2000年のモンゴルツアーに参加した体験をもとに、生徒にいろいろと話をしながら進めている。生徒の反応は様々だ。興味を持って話に参加する生徒もいれば、全く関心のなさそうな生徒もいる。異文化理解を教える難しさを痛感する。そんな折に、今回の通信の原稿を受け取り、様々なプロジェクトの進行状況について知ることができた。励まされ、勇気がわいた。そして、私たち e-dream-s が本当に「教育を変え」てしまうかもしれない、と思った。（田辺恵美）

